キケロ主義の修正と展開

――キケロ散文のコモンプレイスブック――

山　本　佳　生

はじめに

我々はここまで十六世紀のキケロ主義論争、とりわけ1528年にエラスムスが発表した『キケロ主義者』の思想的影響とそれに対する反発について見てきた。エラスムスが強調した「適正 *decorum*」の概念、そして各人の「天性 *ingenium*」にもとづくレトリックの構築は、長い間文芸ジャンルの第一線にのぼることのなかった「書簡」の発見と再評価を促した。また、キケロの絶対的権威性が揺らぐことによって他のラテン作家にも積極的な関心が向けられるようになり、流麗かつ巧緻なキケロ的完全文も、次第に冗長で装飾過多といった否定的評価を受けるようになる。その結果として「センテンティア」と呼ばれる格言や警句などの鋭い表現の価値が見直され、簡潔さや力強さが文体に求められるようになる。そうした文体の代表がセネカであり、タキトゥスであった。このようなラテン白銀期の作家の称揚は、反キケロ主義と呼びならわされる著者たち、とくにその筆頭に挙げられるリプシウスによって牽引された[(1)]。

キケロを絶対的な模範とし、無条件に追随するというキケロ主義の一種のカルト的な雰囲気に対する反発として、反キケロ主義ならびにセネカ、タキトゥスの再評価があるという大きな流れをここに見ることができる。しかし、本稿ではこのような単純な図式から抜け落ちてしまう事柄について取り上げていきたい。それは柔軟なキケロ主義、あるいは修正キケロ主義とも呼ぶこともできる人文主義者の立場である[(2)]。キケロを模倣すべき文体のモデルとしながらも、そこにある程度の自由を認め、キケロ散文の絶対性を相対化する人文主義者たちが一方にいれば、他方では、キケロのレトリックを自分たちの問題意識に近づけ解釈しようとする者たちもいる。エラスムスの『キケロ主義者』以降の十六世紀のレトリックは、このように試行錯誤を繰り返しつつキケロを受容しようとしていたのだ。それゆえ、リプシウスに代表される反キケロ主義ないしセネカ主義にたどり着くまえの人文主義者たちの葛藤と試みについてここで見ておくのは、十六世紀のレトリック思潮全体を理解するのに役立つにちがいない。

そして我々はキケロ受容のもう一つの知的潮流に着目する。それはコモンプレイスブックである[(3)]。十六世紀から次の世紀の中頃までの時期に爆発的に流行したこの知的ツールの存在とキケロ主義の問題はどのような接点を持つだろうか。ここではとりわけキケロ散文によって編まれた

コモンプレイスブックに着目したい。それらは一般的に、キケロの文章をトピック毎に整理し、短文の形で呈示している。こうしたコモンプレイスブックは、キケロを模倣しようとする者たちにとっては、文例や語彙の見本帳であり、ラテン語を学ぶ学生や人文主義者たちにとっては、執筆の材料、弁論の装飾となる引用文を蓄えた宝庫として役立つだろう。反キケロ主義とともに、文体の簡潔さや力強さ、機知やモラルを含んだ短文（センテンティア）が、十六世紀末以降称揚されるようになるが、それとこうしたコモンプレイスブックの隆盛の関係性を探るのは、いままで取り上げられることのなかった観点であり、今後のコモンプレイスブック研究の進展に少なからず寄与するはずだ。それゆえ、この時代のキケロ受容の一端として、キケロ散文によるコモンプレイスブックの分析と考察をおこないたい。

1. 修正キケロ主義

エラスムスの『キケロ主義者』が問題にしたのは、一言でいえば「適正 *decorum*」であった。彼は盲従的なキケロ模倣に対し、歴史的、言語的、本性的適正という観点から批判を加えた。キケロ主義者たちはキケロの言葉遣いに固執することで、ある意味、キケロのラテン語を死んだものとして扱っているのに対し、エラスムスが示したのは、それを現代の文脈で活かすこと、つまりキケロのラテン語を現代でも通用するようにアップデートする必要性である。このような姿勢はこの著作の出版以降、多くの人文主義者たちに、程度の差はあれ、共有されることになった。キケロ文体の完璧な模倣を目指す人々――たとえばピエトロ・ベンボやクリストフ・ロングイユなどがその代表――を厳格なキケロ主義者とするならば、キケロ文体の権威、美しさ、明晰さを認め、それらを現代の主題に適用させようとする人々を柔軟なキケロ主義者と呼ぶことができる。彼らの立場を「修正キケロ主義」とここでは呼ぶことにしたい。とはいえ、彼らの考え方も一様ではない。ゆえに我々は彼らの方向性を次の三つに分けることで、それぞれの立場の特徴を明確にしたい。まず (i) キケロ模倣を推奨しつつも、そこにある程度の自由を認める立場。次に (ii) キケロのラテン語を俗語の発展と洗練に役立てようとする立場。最後に (iii) 他の古典著作の理論や思想をキケロのレトリック解釈に適用する立場。以下、代表的な人文主義者のテクストを参照することで、この修正キケロ主義の大まかな見取り図が得られるだろう。

(i) キケロ模倣の価値を強調しつつも、無批判に行われる模倣は避けるように説くのがスカリゲルである。エラスムスに対する批判論文のなかで、スカリゲルはエラスムスが描くキケロ主義者像が不正確であると指摘する。キケロはアリストテレス哲学を研究するのに、それにふさわしい語彙を作り出しただけでなく、ほかの詩人や哲学者から語彙を借用さえしている。キケロ自身の語彙と借用したものを区別するのはきわめて難しい。それゆえ、キケロ主義者がキケロの語彙に固執しているというイメージはあやまりである。実際のキケロ主義者は、どの時代の語彙を受け

入れ、そして拒否するかの分別を働かせねばならない[(4)]。このようにスカリゲルはキケロ主義者のイメージを修正する。

模倣のための語彙の範囲を拡張すること。現代の事柄について言い表わすのにキケロの語彙だけでは不十分であり、新しい事柄のために新たな語彙を生みだす必要がある。メランヒトンやカメラリウス、そしてシュトゥルムなどプロテスタントの人文主義者たちもこうした問題に意識的であった。しかし、模範とすべき著作家について具体的に言及したのは、彼らよりもほんの少し後の世代に属するミュレである。彼は『古典読書録』のなかで、現代の事柄に即したラテン語表現の開発について主張し、さらに、キケロ以外の著者にもラテン語の美質はあらわれているという理由から、セネカ、リウィウス、プリニウス、タキトゥス、スエトニウス、ラクタンティウスなども模倣のモデルとなりうることを認める[(5)]。語彙の拡張のみならず、模範とする著者の選択肢も増え、いわば模倣の可動域が広がっていくのが見られる。キケロが使用した言葉以外の利用や、新語や造語の開発などは他の人文主義者たちも認めるようになる。

(ii) 俗語の発展のためにキケロ主義を利用したのがペトルス・ラムスである。1557 年、ちょうどプレイアード派の活動が盛んな頃、その活動に正当性を与えるような形で、ラムスの『キケロ主義者』はフランス語を権威ある古典語と並び立つ位置に押し上げることを主張した[(6)]。ラムスはキケロの文体を模倣しようとしたわけではなく、むしろキケロその人を真似しようとした。彼はキケロがアッティカ地方のギリシャ語を学んで、それをみずからの言葉づかいに移し替えたことで、ラテン語を豊かで力強いものにしたことに言及する。フランス語も同様に、古典語を翻訳し、そのすぐれた著者たちを模倣することによって、発展し、洗練していくことができる。ラムスはこのように考え、フランス語においてキケロのように書くことを目指す。そのために彼はフランス語の体系化と教育に力を注いだ。古典語を俗語に移し替えることで、後者を強化するという考えはすでにデュ・ベレーの『フランス語の擁護と顕揚』において明確に示されていたが[(7)]、ラムスはこれをよく理解し、キケロ主義と結びつけたのだ。フランス語におけるキケロの再現ではなく、キケロのように創造すること。ラムスのこのような解釈は、言語的ナショナリズムを推進するだろう。

(iii) キケロ以外の古典著作をキケロ解釈に役立てた者の一人にパウロ・マヌーティオが挙げられる。ギリシャ古典著作とエラスムスの『格言集』の出版により有名となった父アルドの工房を引き継いだパウロのキャリアは、トリエント公会議の時期と重なる。教皇パウルス三世にはじまる反人文主義的雰囲気のなかで、彼は世俗のものである古代の知恵がキリスト教共同体にも適用されうる可能性を追求し、その方針のもとで古典著作の出版を行った。とりわけ彼が力を注いだのは、キケロの書簡や弁論作品の出版である。カトリック側の改革に伴う新たなスコラ主義の台頭、教皇庁の権力の増大を目の当たりにしながら、マヌーティオはキケロ的共和政体、「友愛 *amicitia*」に基づく対話といった人文主義的理想をキケロの作品のうちに見出していた。彼自身も他の人文主義者たちとの交流、対話を実現するものとして書簡を重要視し、その集成の出版をラ

イフワークとして続けた[8]。

このように現実との折り合いを模索するなかで、パウロ・マヌーティオはかつて自身が行っていたキケロ主義的模倣を振り返る。1553年のある書簡において、彼はいままで行っていた執筆は記憶によるもので、才能によるものではなかったと反省する。このような執筆は多くの人ができるものであり、それゆえ大した価値を持たない。そこでマヌーティオは方向転換を行う。そのカギとなるのが、「変奏」であり、我々はここにエラスムスの思想の反映を見ることができるだろう。まずキケロやテレンティウスから引き出した優れた考えについては、黙って思考をめぐらし、よく選び抜かれた言葉によって飾り立てる。一度言論の装いが変われば、それらの考えは別物になるからである。他方で、すぐれた表現にかんしては、それらに手を加えることなく、他の主題をあらわす際に用いる。そのように一つの表現を複数の主題や事柄に適用することで、あたかも一つの蝋から様々に異なる形を作り出すように変奏が可能となる。一つの主題を色々な言葉で表現し、反対に、一つの表現で多くの主題をあらわす[9]。この表現の自在さ、事柄 *res* と言葉 *verba* の変奏によって作られる文章は、クリストフ・ロングイユのような厳格なキケロ主義者が書く無味乾燥で輝きのないものとは全く異なるものだ。マヌーティオは、ロングイユがおこなっているのはただのキケロの「再現」であり、そこには「天性 *ingenium*」が欠けていると批判する。重要なのはこの「天性」であり、それをあらわすレトリックを模索しなければならない。

1554年に出されたある書簡で、マヌーティオはキケロ的な調和の取れた文体と「天性」のレトリックの折衷を図る。この際彼が重視するのは「中庸」だ。

> 多くの人にとって、装飾は文彩の豊かさにあり、弁論の美質は装飾の数に比例すると考えられている。目は人体において最も美しい部分であるが、もしそれが体中にあったら、怪物のようであることを、彼らは考えないのだ[10]。

このようにマヌーティオはクインティリアヌスが「格言」の効果とその多用に伴う危険性について述べた見解を借用し[11]、弁論の装飾をほどほどにしておくことを主張する。なぜなら、突飛な表現、精妙な文句の過度の使用は弁論自体を醜くし、「天性」の発露を妨げてしまうからだ。キケロ的調和はまさに中庸を得たものであり、「天性」と両立しうる。マヌーティオはこのようにキケロの文体を、自身の重視する「天性」と折衷させることに成功する。

だが、1555年のロンギノスの『崇高論』出版をきっかけに、こうした見方は変化を迫られる。ロンギノスはキケロの流れるようにとめどなく広がっていく豊かな言論に対し、デモステネスの急激で力強い言葉を「崇高」なものとして対置した[12]。マヌーティオはこの見解を全面的に支持するとまではいかないものの、言論における単純さ、直截さを発見することで、キケロ的調和と均整を無気力さと軟弱さのあらわれとして感じるようになる。ここまで彼が重視してきた「天性」の発露のためには、長く複雑な構文を持った文体よりも、鋭く、シンプルに言い表すことのでき

る文体のほうが適しているのだ。ここからキケロ模倣において重要な「自然本性 *natura*」と「技巧 *ars*」の関係性も再考されることになる。ベンボやロングイユのようなキケロ主義者たちにとって「自然本性」は「技巧」の産物にほかならない。それゆえ、彼らはキケロを完璧に模倣することを目指した。これとは正反対の見解をマヌーティオは示す。

> 雄弁は種子の状態で才能のうちに散らばっており、その才能がより有能かつ豊かであれば一層、雄弁も大きな効果をもたらす。技巧が自然から生じ、自然によって養われ、支えられるのが望ましいように、技巧が自然から離れれば離れるほど、それは植物のように、生まれ持った水分を失い、急速に枯れて、弱っていく。もし弁論家が技巧と自然のどちらの分け前にもあずかれないのであれば、彼にとっては技巧に欠け、自然が過剰であるほうがその反対の状態よりもよいだろう[13]。

マヌーティオにとっては「技巧」は「自然本性」より生み出されるものにほかならず、前者は後者によって養われ、支えられることが前提である。したがって、目指すべきはキケロの技巧的再現ではなく、各人の「天性」から生じるレトリック、「技巧」を見つけだすことである。ロンギノスの『崇高論』は、偉大な魂の発露を「崇高」だと定義したが、これを受けてマヌーティオは、レトリックに必要なのはヘルモゲネスやクインティリアヌスが示すような理論と規則ではなく、ただ偉大な実例のみであると考える。それゆえ、最高の散文の実例としてキケロはやはり重要であり、その秩序と調和は維持されるべきだとする。ロンギノスの著作はこうしてマヌーティオにキケロの模倣と解釈の在り方の修正を迫った。

エラスムスが呈示した「適正」と「天性」をどのようにキケロ理解に適合させるか、それが1528年の『キケロ主義者』以降の人文主義者たちの課題であったといえるだろう。ここで見たそれぞれの人文主義者たちの反応は限定的ではあるが、少しずつキケロという絶対的模範の権威が相対化されゆくさまをあらわしている。

2. キケロ散文のコモンプレイスブック

エラスムスは『キケロ主義者』のなかで、「キケロ主義」という病に罹ったノソポヌスがキケロの語彙やフレーズの集成をみずから編み、そこから引用した言葉だけで文章を執筆することを風刺的に描いているが、これはエラスムスによる誇張などではまったくない。実際、ニツォーリオによる『キケロ語彙集』やカファーロの『キケロ文例集』などを使ってキケロ主義者たちは、キケロの使った言葉と語彙だけを用いて言論を組み立てることができた[14]。それらの多くはアルファベット順に小見出しがついており、それぞれにキケロの文章が実例として引用されている。語彙集の場合であれば、使いたい動詞や名詞の見出しを参照し、キケロがどのように使っている

かを確認できる。また、文例集の場合は主題に即した例文がキケロの著作から引用されている。それ以外にもキケロが用いる哲学的用語についてのラテン語とギリシャ語の辞書などもあり、こうした書物を参照すれば、キケロのように書くことも可能である。実用性と効率性のために、これらはいずれも見出し語や索引という情報整理と検索からめの装置をそなえていた。この点においていまから見るコモンプレイスブックは、キケロ主義者たちのための参照用書籍の延長線上にあるといえるが、決定的に異なるのは読者層の広さである。コモンプレイスブックはキケロ主義者に限らず、学生や人文主義者の多くが利用できたことで、爆発的な人気を得ただけでなく、いわばこの時代の共通の教養として機能したのだ。十六世紀のキケロ受容を考える際、我々はキケロの作品が全集以外の集成の形でこのように伝播したことも考慮に入れなければならないだろう。

ボルドーのギュイエンヌ学院において、その草創期から講師を務めていたペトルス・ラグネリウスは、1546 年（ちょうどこの年はモンテーニュが学院を卒業した年である）キケロ散文のコモンプレイスブックを出版する[15]。この集成の人気ぶりはすさまじく、1540 年代だけで少なくとも五版を数え、その後内容を増補した完全版が、1550 年代の後半にリヨン、1564 年にアントウェルペンで確認され、ケルンでは少なくとも 1567 年から 73 年のあいだに三版を数えている。ヴェネツィアではまだ増補されていない初期のヴァージョンが 1548 年に出たのち、完全版が 1565 年に出ている。1580 年代にはロンドンで完全版が出版され、その後十七世紀に入ってからも複数回増刷している。宗教的党派性の薄さから、とくにプロテスタント地域では、他のコモンプレイスブックや引用句の集成の核として取り入れられ、アレンジを加えられることもあったようだ。また、1550 年にはフランス語のリズムに合わせた翻訳が、そして 1574 年には完全な仏訳が出版されている[16]。

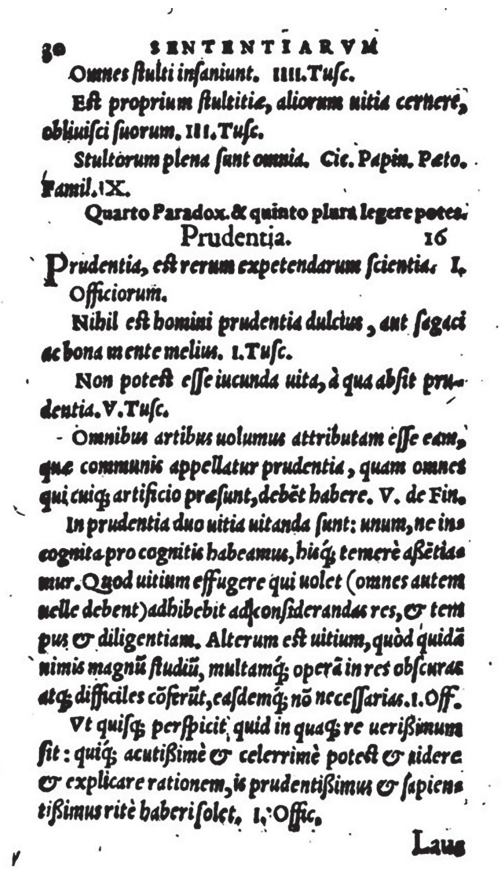

80 SENTENTIARVM
Omnes stulti insaniunt. IIII.Tusc.
Est proprium stultitiæ, aliorum uitia cernere, obliuisci suorum. III.Tusc.
Stultorum plena sunt omnia. Cic. Papin. Peto. Famil. IX.
Quarto Paradox. & quinto plura legere potes.
Prudentia. 16
Prudentia, est rerum expetendarum scientia. I. Officiorum.
Nihil est homini prudentia dulcius, aut sagaci ac bona mente melius. I.Tusc.
Non potest esse iucunda uita, à qua absit prudentia. V.Tusc.
Omnibus artibus uolumus attributam esse eam, quæ communis appellatur prudentia, quam omnes qui cuiq; artificio præsunt, debẽt habere. V. de Fin.
In prudentia duo uitia uitanda sunt: unum, ne incognita pro cognitis habeamus, hiq; temerè assẽtiamur. Quod uitium effugere qui uolet (omnes autem uelle debent) adhibebit ad considerandas res, & tempus & diligentiam. Alterum est uitium, quòd quidã nimis magnũ studiũ, multamq; operã in res obscuras atq; difficiles cõferũt, easdemq; nõ necessarias. I. Off.
Vt quisq; perspicit quid in quaq; re uerissimum sit: quiq; acutissimè & celerrimè potest & uidere & explicare rationem, is prudentissimus & sapientissimus ritè haberi solet. I. Offic.
Laus

図 1 P. Lagnerius, *Marci Tullii Ciceronis sententiae illustriores*, Paris, R. Estienne, 1546.（見出し語「思慮 prudentia」のもとに出典付きの引用文が配列されている）

このコモンプレイスブックは当初、キケロからの引用のみで構成されていたが、重版のたびにテレンティウスやエラスムス『警句集』、『喩え集』、そしてデモステネスのラテン語訳など、多くの引用が追加され、完全版はいわば様々な著者による優れた短文のコレクションとなっている。それらの配置方法は、典型的なコモンプ

レイスブックのそれであり、主にモラルに関する見出し語（「神」、「自然」からはじまり、人間の親や子供に対する愛情、知識欲、哲学や雄弁、軍事術などの学問分野など多種多様である）に、キケロの弁論作品のみならず、哲学的論考や書簡からの引用文が出典とともに配列されている（図１参照）。見出し語の順番は厳密な規則にしたがっているわけではない。こうした緩さが、見出し語の追加や他の集成に取り込まれることを可能にしているだろう。当時、欧州中の学生や人文主義者がキケロ散文にアクセスするための最良のツールの一つであったといっても過言ではないこのコモンプレイスブックは、モラルや機知に富むフレーズを蓄えた宝庫として、弁論や書簡の作成、装飾に役立ったにちがいない。だが、著者の真意はそうしたところにはない。

読者に宛てた序文のなかで、ラグネリウスは短文によって言葉の豊かさではなく、事柄・主題の豊かさを得るように主張する。重視されるのは空疎で装飾的な言葉の連なりではなく、鋭く、力強い短文である。それらが学問知識にしっかりと裏付けされることを著者は望んでいる。ここに我々はキケロの「学識ある弁論家 *doctus orator*」の理想の反映を見るだろう。短文なしにすぐれた弁論はなく、短文を多く用いた弁論であっても、秩序や規則に欠けるものは子供じみた弁論となる。それゆえ、目指すべきは、短文がその威厳と精妙さによって、弁論を輝かせることである。

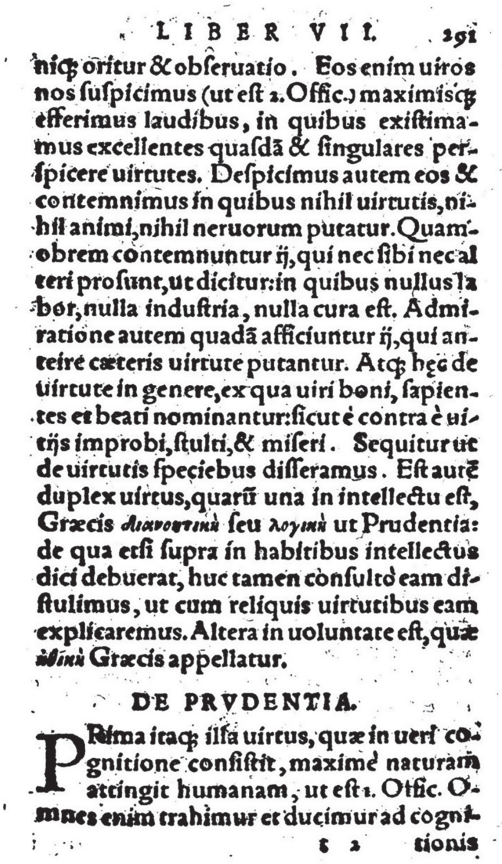
このコモンプレイスブックは上で見たキケロ主義の修正と方向性を共有している。(i) については、重版のたびにキケロ以外の著作家の引用を付加することで、いわば絶対的模範としてのキケロの価値を相対化しているといえる。次いで (ii) に関しては、俗語（ここでは仏語）に翻訳され、流通することによって、キケロを俗語でも読み、引用することができるようになるだろう。これは俗語で書かれた作品を豊かにする栄養剤として役立つはずだ。(iii) についても、コモンプレイスブックというフォーマットにキケロ散文を還元すること、つまり「ロキ・コムーネス」の方法の適用と短文形式への変換という点で、この集成はキケロを時代の要請に応えた形で呈示しているといえる。共和政を代表する政治家、とめどなく押し寄せる波のように、幾重にも言葉を重ねた弁論によって聴衆を魅了する弁論家、いわば「雄弁」というものの体現としての姿ではなく、ここでのキケロは機知とモラルに富む鋭い表現の豊かな源泉というイメージに転換させられていると見ることができよう。

ラグネリウスの典型的なコモンプレイスブックとは異なる、いささか個性的なキケロ散文のコモンプレイスブックをあらわしたのがトマス・フライギウス（1543-83）である。ドイツ南西部フライブルク出身のこのユマニストの人生は、ラムス主義の伝道に捧げられたといっても過言ではない。バーゼルで法学の博士号を取得した 1568 年にフライギウスはラムスに出会う。これが彼の人生に決定的な影響を与えた。1570 年代はフライブルクに戻り、教職に就くものの、彼はアリストテレス哲学ではなく、ラムスの思想を教授し、それを理由に 1575 年には教職を解かれることになる。その後バーゼルの出版工房で編集の仕事に携わりつつも、教職への復帰を試みるが、周囲のラムス思想への反感などもあり、結局その目的は果たせずに終わる。彼の著作で有名なのが『ラムス伝』であろうが、我々は 1575 年の『キケロ主義者』に注目したい [17]。すでに前年の 1574 年

に論理学と倫理学を扱った著作のなかで、アリストテレス『ニコマコス倫理学』、キケロ『義務について』、『友情について』、『老年について』をディアレクティックの観点から分析し、とくに『ニコマコス倫理学』と『友情について』の分析では、主題、定義、種といったトピックを設定し、論点を整理している。前者で呈示される「徳」についてはエラスムス的な類似と対立に基づく規則によってトピックを並べており、そこにときおり証言としてラテン詩人の詩句が引用するなど、フライギウスは「ロキ・コムーネス」の方法をよく理解し、使いこなしているといえるだろう。

『キケロ主義者』は、一般的事柄から個別へと論理をすすめるラムス主義を基調としながらも、著者自身が序文で言及しているように、アグリコラ、エラスムス、キトラエウスなどの「ロキ・コムーネス」の方法を適用し、またメランヒトンやシュトゥルムなどのプロテスタント陣営の教育思想も反映した著作である。フライギウスは主要かつ最も一般的な十の見出し語を設定し、それぞれをより個別的な事柄に関するトピックへと分割していく[18]。合計で 125 になるこれらのトピックはラムス主義の方法に則ったものだといえる。特徴的なのはトピックの中身である。ラグネリウスのような典型的なコモンプレイスブックに見られる配列はここにはない。トピックの元に引用文が並べられるのではなく、切れ目のない論述が見られるだけである（図 2 参照）。論述はディアレクティックのトピックである原因、結果、部分、付帯性などにしたがって書かれている。この際キケロは何の役に立っているのかといえば、論点を強化する権威として言及され、ときおりその出典が示される。フライギウスはキケロの思想や作品がどのように各トピックの論証たりえるか、その実践を示しているのだ。つまりこのコモンプレイスブックは、トピックのもとに装飾のための引用文を配したレトリック的なものではなく、トピックとそれをキケロの思想に基づいて論証したものが並ぶディアレクティック的性格の集成であるといえる。

このラムス主義を適用したフライギウスのコモンプレイスブックは、たしかに引用の宝庫としては機能しないが、ディアレクティックのトピックによる分析とそこからの文章作成の方法をあらわしているのだ。装飾的な文章の積み重


LIBER VII. 291

nicq; oritur & obſeruatio. Eos enim uiros nos ſuſpicimus (ut eſt 2. Offic.) maximisq; efferimus laudibus, in quibus exiſtimamus excellentes quaſdã & ſingulares perſpicere uirtutes. Deſpicimus autem eos & contemnimus in quibus nihil uirtutis, nihil animi, nihil neruorum putatur. Quamobrem contemnuntur ij, qui nec ſibi nec alteri proſunt, ut dicitur: in quibus nullus labor, nulla induſtria, nulla cura eſt. Admiratione autem quadã afficiuntur ij, qui anteire cæteris uirtute putantur. Atq; hęc de uirtute in genere, ex qua uiri boni, ſapientes et beati nominantur: ſicut è contra è uitijs improbi, ſtulti, & miſeri. Sequitur ut de uirtutis ſpeciebus diſſeramus. Eſt autẽ duplex uirtus, quarũ una in intellectu eſt, Græcis διανοητικὴ ſeu λογικὴ ut Prudentia: de qua etſi ſupra in habitibus intellectus dici debuerat, huc tamen conſultò eam diſtulimus, ut cum reliquis uirtutibus eam explicaremus. Altera in uoluntate eſt, quæ ἠθικὴ Græcis appellatur.

DE PRVDENTIA.

Prima itaq; illa uirtus, quæ in ueri cognitione conſiſtit, maximè naturam attingit humanam, ut eſt 1. Offic. Omnes enim trahimur et ducimur ad cogni-

t 2 tionis

図 2 T. Freigius, *Ciceronianus*, Bâle, Henricpetri, 1575.（見出し語「思慮 prudentia」のもと，引用文ではなく，切れ目のない論証文が続く）

ね（たとえばラグネリウスのコモンプレイスブックなどがその例）がいかにも学校教育的であり、真の知識へ至ることを阻害すると考えるルネサンス後期以降の人文主義者たちには、様々な事柄を一般的なカテゴリーに「消化」し、そこから各々が論証を組み立てる仕方のほうが好まれた。豊かに花々を収集することよりも、いかに分析的で効率的にそれらを配置するか、そのシステムの構築に力が注がれた。とくに 1580 年以降の英国では、コモンプレイスブックとラムス主義が少しずつ知られるようになり、このフライギウスの集成は、いわば哲学と雄弁の結合を体現し、ラムスのみならずルネサンスの思想の精華を反映した著作として受け入れられた [19]。

ここまで見てきた二つのコモンプレイスブックは、一つはキケロ散文を短文 (センテンティア) の形に還元し、もう一つはキケロをディアレクティックの観点から分析、そしてそれに基づいて論証を構築する、というものであった。いずれの場合も、キケロという偉大な模範に対する解釈をあらわしており、これをキケロ主義の修正とみなすことができるだろう。キケロ主義論争と直接の関係がなくとも、コモンプレイスブックの隆盛もやはり時代の流れを反映したものだったのだ。

＊＊＊

キケロを無条件に賛美し、完全に模倣しようとする人々と、キケロの価値を認めつつも、ほかの模倣の選択肢を模索しようとする人々のあいだでおこなわれたキケロ主義論争を経て、人文主義者たちは白銀ラテン期の著作家を再発見するに至る。この最後の運動を牽引したのが、我々もよく知るモンテーニュでありリプシウスであるが、彼らに至るまでの思想とレトリックの潮流をここで取り上げた。この潮は幾重もの波が重なりできており、そのうちの一つとしてコモンプレイスブックの隆盛が挙げられるだろう。この学校教育向きの知的ツールについて、我々は今後もそのメカニズムや機能について考察をめぐらし、この時代のレトリックにおける変化の要因の一つとして描きだすことを試みていきたい。

注

(1) キケロ主義論争に関する研究は膨大であり、すべてをここで網羅することはできないが、主要なものをいくつか挙げておく。I. Scott, *Controversies over the Imitation of Cicero as a Model for Style and Some Phases of Their Influence on the Schools of the Renaissance*, New York, Colombia University, 1910 ; H. Gmelin, « Das Prinzip der Imitatio in den romanischen Literaturen der Renaissance », in *Romanische Forschungen. Organ für Romanische Sprachen, Volks unt Mittellatein*, vol. 46, 1932, pp. 83-360 ; M. Fumaroli, *L'âge de l'éloquence*, Genève, Droz, 2009 (3e éd.) [1ère éd., 1980], 1er part., pp. 35-230 ; G. W. Pigman III, « Versions of Imitation in the Renaissance », in *Renaissance Quarterly* vol. 33, nº 1, 1980, pp. 1-32 ; J. Chomarat, *Grammaire et rhétorique chez Érasme*, 2 vols, Paris, Les Belles Lettres, 1981, II, pp. 815-840 ; K. Meerhoff, *Rhétorique*

et poétique au XVIe siècle en France, Leyde, Brill, 1986, pp. 25-45 ; Ch. Mouchel, *Cicéron et Sénèque dans la rhétorique de la Renaissance*, Marburg, Hitzeroth, 1990, Ier part., pp. 42-144 ; J. Lecointe, *L'ideal et la différence. La perception de la personnalité littéraire à la Renaissance*, Genève, Droz, 1993, ch. 3 et 4, pp. 409-566.『エセー』からの引用は次の版からおこなう。*Les Essais*, texte établi et annoté par Jean Balsamo, Michel Magnien et Catherine Magnien-Simonin, 1 vol., Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 2007.

(2)「厳格な」キケロ主義者と「柔軟な」キケロ主義者に区別して論じたのが Ch. Mouchel, *op. cit*. pp. 72-88.

(3) ここで取り上げるコモンプレイスブックについては A. Moss, *Printed commonplace-books and the structuring of Renaissance thought*, Oxford, Clarendon Press, 1996, surtout ch. 6, "Commonplace-Books at School", pp. 134-185.

(4) J. C. Scaliger, *Orationes duæ contra Erasmvm : Oratio pro. M. Tvllio Cicerone contra Des. Erasmvm (1531) et Adversvs Des. Erasmi Roterod. Dialogvm Ciceronianvm Oratio secvnda (1537)*, textes présentés, établis, traduits et annotés par Michel Magnien, préface de Jacques Chomarat, Genève, Droz, 1999, p. 117, v. 912-914, « *Quoniam et ipse quae ad philosophiam spectant et quae ad forum pertinent, aliter atque aliter pertracavit, multa nova nomina, Aristotelico exemplo felicissime meditatus…* »

v. 920-924, « *Quod autem ait Ciceronianos nullis aliis vocibus quam quae in illius extant libris, uti consuevisse, quantum id falsum sit vel ex ipso Cicerone videmus, qui Terentii atque Ennii atque aliquot aliorum poetarum vel obsoletis vocabilis usus est. Qua in re quantus adhibendus sit modus, haud facile dici potes*t. »

v. 935-937, « *Sed ita Ciceroniani censent, certa genera autorum tota penitus imitanda, certasque aetates effingendas ; alia tota reiicianda, in quibusdam iudicium adhibendum*. »

(5) M.-A. Muret, *Variarum lectionum libri XV*, in *Opera omnia*, t. 3, 1841, Lib. XV, cap. 1, "Sermo habitus cum Dario Bernardo de stultitia quorumdam, qui se Ciceronianos uocant", p. 328.

(6) P. Ramus, *Ciceronianus*, Paris, A. Wechel, 1557, pp. 13-18. また次も参照。M. Fumaroli, *op. cit.*, p. 455 *sq*. ; J. Lecointe, *op. cit.*, pp. 556-561.

(7) Joachim Du Bellay, *Œuvres complètes, Ier volume. La Deffence, et illustration de la langue françoyse*, éd. F. Goyet et O. Millet, Paris, Classiques Garnier, 2003, pp. 22-24.

(8) ここまでの記述は次に負っている。Ch. Mouchel, « Les rhétoriques post-tridentines (1570-1600) : la fabrique d'une société chrétienne », in *Histoire de la rhétorique dans l'Europe moderne*, éd. Marc Fumaroli, Paris, PUF, 1999, pp. 459-463.

(9) ここまでの内容は次の書簡の内容を適宜要約し、まとめたものである。*Pauli Manutii Epistolarum libri XII*, Lipsiae, J. H. Klosium, 1698, Lib. I, Ep. IV, à Stephano Saulio, pp. 15-16, « *Cumque id quod enitet in oratione, aut in re uideatur esse, aut in uerbis, ego olim rem significatam simul cum uerbis significantibus sumebam, eaque meis scriptis cum inseruissem, tum optimum illud, quod quaeritur imitando, plane arbitrabar me esse consecutum; postea coepit mihi meum consilium displicere : cogitaui, quoniam id esset memoriae magis, quam ingenii, quod ego efficerem praestare multos posse, quod autem multi possent, egregium non esse. […] Exquisitas sententias de Cicerone excerptas, aut de Terentio, tacitus in animo uersabam, eas ornabam uerbis, quam poteram lectissimis, ut quasi uestitu orationis mutato, cum eaedem essent, aliae tamen uiderentur. Erat non dissimilis in uerborum figuris commentatio. Si quas notaueram illustriores ad alias sententias ita traducebam, ut interdum eamdem locutionem ad res prope innumerabiles accommodans, quasi ex una cera plures imagines, nec tamen eiusdem generis, effingerem*. » 特にこの最後の文はクインティリアヌス『弁論

家の教育』第十巻 5 章 9 節を踏まえている。Cf. Quintilien, *L'institution oratoire*, texte établi et traduit par J. Cousin, Paris, Les Belles Lettres, 1979, X, V, 9, « […] *uelut eadem cera aliae aliaeque formae duci isolent*. »

(10) Lettre à Antonio De Gli Amici, in *Tre Libli di lettere volgari*, Aldus, Venise, 1556, p. 87 recto, « […] *parendo loro [molti], che l'ornare consista nelle moltitudine de gli ornamenti; e che la qualità delle bellezza cresce insieme con la quantità del bello; non attendosi, che l'occhio è la piu belle parte corporale, c'habbi l'huomo; e nondimeno, se l'huomo fosse tutto occhio, egli sarebbe un mostro*. » 我々は次の仏語訳を参照した。Mouchel, *op. cit.*, p. 76. « […] il leur [beaucoup de gens] semble que l'ornementation consiste dans l'abondance des figures, et que la beauté du discours s'accroît avec la quantité des ornements, sans prendre garde que l'œil est la plus belle partie du corps humain et que néanmoins, si l'homme avait des yeux par tout le corps, ce serait un monstre. »

(11) Cf. Quintilien, *éd. cit.*, VIII, V, 34, « *Ego uero haec lumina orationis uelut oculos quosdam esse eloquentiae credo. Sed neque oculos esse toto corpore uelim, ne cetera menmbra officium suum perdant* […]. »

(12)『崇高論』については多くの研究が存在するが、ルネサンスのレトリックの文脈におけるこの作品の位置づけと影響、意義については次の校訂版のイントロダクションが重要。(Ps.) Longin, *Traité du Sublime*, trad. N. Boileau, introduction et notes de Francis Goyet, Le Livre de Poche, 1995. また併せて次の論文も参照のこと。F. Goyet, « Le pseudo-sublime de Longin », in *Études littéraires*, vol. 24, no 3, 1992, pp. 105-120.

(13) "*Discorso intorno all'ufficio dell'oratore*" in *Tre Libli di lettere volgari*, Aldus, Venise, 1556, p. 15 verso. 我々は次の仏語訳を参照した。Fumaroli, *op. cit.*, p. 165, « [L'éloquence] produit un effet d'autant plus grand qu'est plus capable et plus fertile le génie où elle est éparse, à l'état de germe (*nondimeno tanto maggior effetto produce, quanto è piu capace & piu fertile quell'ingegno, oue ella è sparsa ; e seminata) ; de même que l'art est né de la nature (l'arte è nata dalla natura*), et veut être nourri et soutenu par elle, de même plus il est privé d'elle, plus il se fait faible, à la manière des plantes, qui, manquant de leur humeur native, se dessèchent rapidement. Si l'orateur ne peut participer également de l'art et de la nature, il vaut mieux qu'il y ait en lui manque d'art et surabondance de nature, que le contraire (*è piu desiderabile, che sia in lui difetto di arte, e soprabondanza di natura; che all'incontro difetto di questa…*) […]. »

(14) Mario Nizolio, *Observationes in M. T. Ciceronem quibus omnis vere Latine loquendi ratio…per exempla Ciceronis plane demonstratur…*, Bâle, 1536 ; Cristoforo Cafaro, *Ciceronianae phrases ad rectam latine loquendi normam apprime utiles. Nunc primum in lucem editae*, Venise, G. A. Valvassore, 1565. そのほかにもキケロが用いたギリシャ語の語彙集や、(Henri Estienne, *Ciceronianum lexicon graecolatinum, id est lexicon ex variis graecorum scriptorum locis a Cicerone interpretatis, collectum ab Henrico Stephano. Loci graecorum authorum cum Ciceronis interpretationibus*, H. Estienne, 1557.) キケロ書簡集からの詞華集などもある。G. Du Préau, *Flores et sententiae scribendique formulae, ex Marci Tullii Ciceronis epistolis familiaribus selecte, et in communes locos ad cujuscunque generis concinnandas epistolas quam accomodatissimos coagmentatae, et certo ordine digestae*, Anvers, C. Plantin, 1566.

(15) Petrus Lagnerius, *Marci Tullii Ciceronis sententiae illustriores, Apophthegmata item et parabolae sive similia, aliquot praeterea ejusdem piae sententiae*, Paris, R. Estienne, 1546. また次も参照。A. Moss, *op. cit.*, p. 167 sq.

(16) Guillaume Guéroult, *Les Sentences de Marc Tulle Ciceron. Ausquelles sont adioustees plusieurs graues &*

illustres Sentences, recueillies des plus excellens Autheurs en la langue Latine, traduictes d'icelle en Rythme Francoyse. Par Guillaume Gueroult, Lyon, Barthazar Arnoullet, 1550 ; François de Belleforeste, *Les Sentences illustres de M. T. Cicéron et les Apophthegmes, avec quelques sentences de piété, recueillies des oeuvres du mesme Cicéron ; aussi les plus remarquables sentences tant de Térence que de plusieurs autres autheurs et les sentences de Démosthène...Le tout traduit nouvellement de latin en françois...*, Toulouse, J. Lertout, 1582.［奥付は 1582 年だが、コンデ公ルイ・ド・ブルボンの息子、シャルル宛ての献呈文には 1574 年の日付が見られる］

(17) *Ciceronianus, Iohan Thomæ Freigii, In quo : Ex Ciceronis monumentis, Ratio instituendi Locos Communes demonstrata : & Eloquentia cum Philosophia coniucta descripta est*, Basileæ, Sebastianum Henricpetri, [1575]. また次も参照のこと。A. Moss, « Commonplace-Books and Ramist Branches », in *Autour de Ramus : textes, théorie, commentaire*, études réunis par K. Meerhoff et J.-Cl. Moisan, Québec, Nuit Blanche, 1997, pp. 371-387 ; *id.*, *op. cit.*, pp. 158-160.

(18) 十の見出し語は次の通り。1. Deus 2. Homo 3. Natura 4. Doctrina seu disciplina seu institution 5. Exercitatio 6. Artes 7. Affectus, Perturbationes, Cupiditas, Concupiscentia, Appetitus 8. Virtutes (subsection : prudentia; fortitudo; temperantia; liberaritas; magnificentia; studium honoris, magnanimitas; clementia, mansuetudo, placabilitas; veritas; amicitia, humanitas; urbanitas; iustitia) 9. Corporis bona & mala 10. Fortunae bona & mala

(19) これについては次を参照のこと。A. Moss, *art. cit.*, pp. 381-385.